

IV 花 き

実 況

1 キク

奥越での8月咲きギクは、暮れ植えの8月咲が当初5日以上早かったが、7月の高温により蕾の発達が大きく抑制され、「小紫」、「小鈴」等の品種で、8月中旬に出荷できない株がみられた(図1、図2)

8月5日がピークであったが、それ以降の出荷は12日までで100~400箱で、例年より少ない。

「小鈴」8月11日収穫で切花長127cm

葉数60枚、「シューペガサス」で8月5日収穫で120cm、51枚キク単価は60~80円で推移した。病虫害では7月下旬からアザミウマ類、オオタバコガ、黒さび病の発生が増加した。

大野市の春植え9月咲きギクの草丈は(8月15日調査)、「くるみ」が草丈90cm、葉数57枚(84cm、55枚)、9月中旬開花見込。一部にオオタバコガの食害がみられる。アザミウマ類が全域で微発生。ダニ類は少ない。

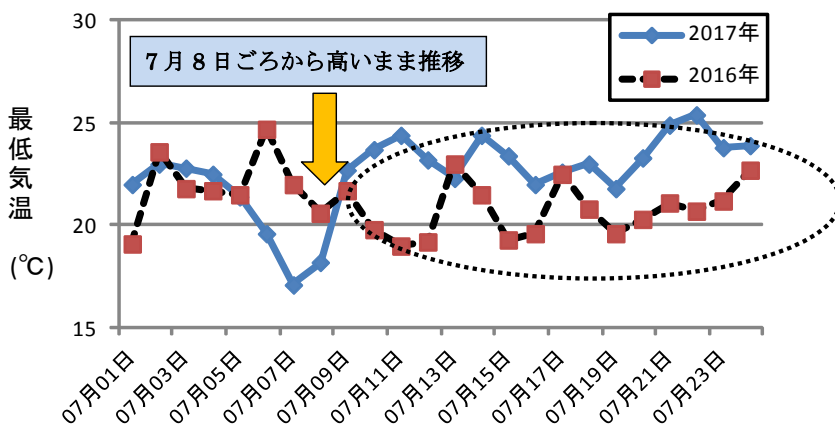


図2 大野市AMEDAS最低気温の比較

ボン」草丈58cm(60cm)、蕾径5mm(6mm)と平年並み。

東郷の「小鈴」草丈98cm、「小雨」96cm、「恋心」96cmで、7割程度収穫終わり(8月15日)。「翁丸」94cmで約5割の開花。9月咲の「小朝」58cm(75.5cm)、蕾径7mm(7mm)。

病虫害では、葉裏にアザミウマ類の被害が多く目立ち、一部にオオタバコガの食害がみられる。

越前町宮崎地区の4月に定植された8月咲ギクは「恋心」「はじめ」「やよい」が収穫終了。「小鈴」「翁丸」がほぼ収穫終了。草丈101cm。「シューペガ」94cm、「花絵」112cmで、収穫盛期。9月咲ギクの「かれん」草丈82cm、

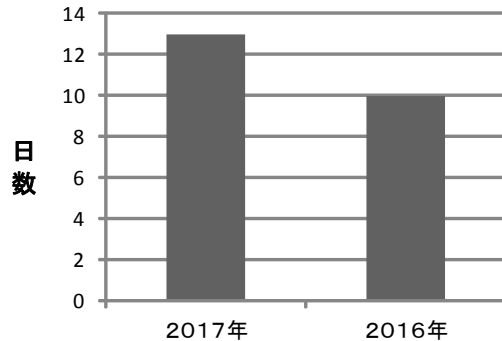


図1 最高気温30°C以上日数の比較(7/1~7/24)

坂井では7月の高温乾燥により生育が悪い圃場があるが、5月5日定植の「小鈴」で、草丈82cm。開花は例年より5~7日遅い。一部に白さび病少発生。

アザミウマ類、アブラムシの食害が多い(写真1)。特に8月下旬~9月上旬は葉裏に多く見られる。

福井市の二日市で、「花絵」の草丈115cmで7割開花。「小鈴」の開花はほぼ終了。9月咲の「リ



写真1 葉裏につくアブラムシ (あわら市: 8月上旬)

蕾径 3mm(昨年 86cm、4mm)であった。病虫害はカスミカメが多発した。一部にオオタバコガが発生。

越前市の盆咲ギク「はじめ」85cm、「秀光」110cm、「恋心」97cmで、8月14日現在、ほぼ出荷ピークは過ぎた。

二州の4月20日に定植した8月咲き小ギク「小鈴」、「花絵」、「さざなみ」等が収穫中。「山手白」「夏まつり」「水鳥」が開花始め。新品種の「たまぶき」72cm、「しらなみ」93.2cm、「ちあき」91.6cmで、膜切れ～開花期である。

8月9日調査(昨年8月15日調査)の9月咲き小ギクの草丈は、「映紅」が草丈60cm(75.6cm)、蕾径2.0mm(5.9cm)、「わかさ」が草丈80.8cm(94.4cm)、蕾径3.0mm(3.9mm)、「おりがみ」が草丈94.4cm(昨年84.6cm)蕾径3.2mm(昨年5.3mm)。10月咲き小ギクの生育は、「お吉」が草丈37.8cm(36.2cm)、「おりづる」34.8cm(56.4cm)、「はくろ」25.0cm(35.6cm)であった。寒菊は苗の腐りが多かった。

若狭の4月17日より定植された8月咲きキクはほとんど開花したが、「こころ」、「まぼろし」、「ふくろう」、「七夕かざり」等は未開花～70%程度開花。病虫害は全体的にアザミウマ類が少発。5月16日より定植された9月咲き小ギクは、8月14日調査(昨年度8月15日調査)で、「楽園」の草丈が91.8cm(110.2cm)、蕾径3.7mm(4.2mm)、「初秋」82.0cm(101.6cm)、4.0mm(8.4mm)、「おりがみ」93.8cm(123.4cm)、6.9mm(5.6mm)で、キクキンウワバ少発生、アザミウマ類少～中発生。

10月咲き施設栽培の小ギクは、「ようせい」が37.9cm(39.0cm)、「白馬」33.6cm(33.0cm)、「おりづる」が58.8cm(44.6cm)となっている。電照抑制の11月咲作型では、草丈が10cm程度で、高温による生育不良の可能性はある。寒菊は高温による育苗失敗で、苗数確保が困難であった。

2 ユリ

奥越のシンテッポウユリは、4月に定植した「オーガスタ」が大坂、金沢、福井へ出荷された。本年度は実生苗の出荷がやや遅いことに加えて、葉枯病が花蕾、葉にみられた。草丈85cm(92cm)、蕾数3～6輪。

坂井のLAユリは球根が8月下旬に入荷予定。JAの施設により馴らしと芽伸ばしを行う予定。「オーガスタ」は生育のばらつきがみられた。8月上旬に金沢に出荷された。8月7日の台風で被害が見られた。



写真2 シンテッポウユリ
(あわら市)

3 スイセン

促成スイセンは、7月下旬から8月上旬に定植された。早い圃場では発根が始まった(8月20日調査)。また、露地圃場のスイセンは圃場によりバラツキはあるが発根が始まり、平年並みである。

4 ストック

坂井地区のあわら市ではアイアンシリーズが主要な品種であり、直播が8月8日から開始された。品種は「チェリーアイアン」、「マリンアイアン」、「アプリコットアイアン」、「ホワイトアイアン」等であり、8月中旬現在で本葉2～3枚程度である。一部で高温による発芽不良が見られた。

越前市ではカルテットシリーズが8月20日以降(昨年22日)に直播された。

5 トルコギキョウ

あわら市の抑制作型の定植は7月下旬～8月5日に行われた。品種はロベラシリーズ、レイナシリーズ、ネイルシリーズが主。7月下旬定植は4対葉。10月上旬出荷予定。一部に立枯病小発生。5月下旬定植の「バルカンマリン」が開花盛期で草丈90cm前後で品質良い。あわら市の一部圃場で株腐病が発生した。



写真 3 トルコギキョウ株腐病
高温多湿下で発生。多犯性であるため、翌年の持越しに注意必要。

越前市の8月14日調査の(昨年16日調査)トルコギキョウでは、ほぼ終了。ハスモンヨトウが少～中発生。冷蔵苗の7月定植作型では、草丈12cm、7対葉で、一部出蕾。

敦賀の「ブルーシルエット」、「ピンクシルエット」は7月下旬に収穫が終了した(11月21日定植)。美浜町の3月下旬、5月下旬定植もので、8月上旬中旬に開花した。

若狭では6月上旬に定植された「あすかの雫」「バルカンホワイト」「カルメンバイオレット」等が草丈60～70cmで、8月上旬中旬に直売を中心に販売された。

6 その他

福井東郷の切り花用ハボタンは7月28日定植で、「初紅」、「晴姿」が8月15日調査で(昨年17日調査)、草丈17cm、11cm前後であった。葉数は16枚、10枚前後であった。二日市の「初紅」、「晴姿」は草丈12cm、20cm、葉数11枚、15枚であった(昨年:「晴姿」草丈15～19cm、葉数17～22枚)。病害虫はアオムシ類の食害がみられる。

アスターはあわらのステラシリーズ、あずみ系が出荷されており、さび病が多発。彼岸出荷用の電照抑制栽培は15～20cm。開花はやや遅い。一部に灰色かび病発生。

あわらのオータムヴィオレは草丈60～70cm、蕾径は8mm前後。



写真 3 アスター(あわら市:8月上旬):

対 策

1 秋植え夏ギクの定植準備と定植

(1) 苗づくりの管理日程

時 期	8/17	9/10	9/15	9/25	10月上
・かき挿し苗	台刈		かき挿し		苗とり・定植
・土寄せ苗	台刈	土寄せ		仮植	定植

本年は、高温で株が弱っているため、雨をめぐけて台刈りを行うか、雨後草勢が回復してから行う。草丈が低くスタントウィロイドに罹っている可能性がある株や黒さび病が罹病している株は用いない。

(2) 苗床の病虫害防除の徹底

白さび病とアザミウマ類を中心に防除を徹底する。病気に弱い品種は特に罹病しないように注意する。ウイルスを媒介するアザミウマ類の防除を励行する。併せて周辺環境の除草を励行し、飛び込みを防止する。

病害：有機硫黄系剤（ステンレス剤、ジマンダイセンフロアブル、エムダイファー水和剤）を週1回、予防剤散布する。

害虫：ミカンキイロアザミウマやミナミキイロアザミウマには、オンコル粒剤5やプリンスフロアブルを散布する。カブラヤガが産卵を行うときがあるので、適切な対策を行う。ただし、プリンスフロアブルは大型の幼虫（オオタバコガ等）には効果が少ない場合があるので、注意する。

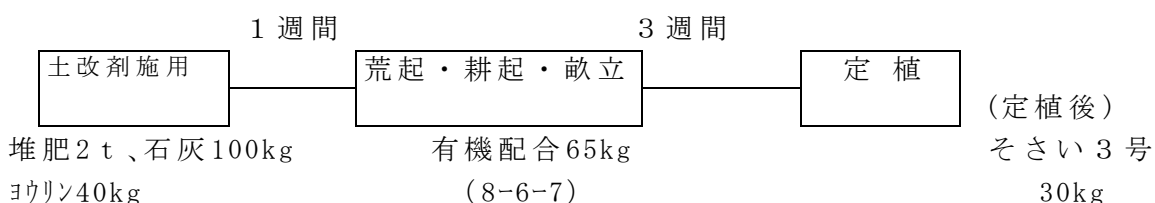
(3) かき挿し苗の場合、台刈2～3週間後の9月上中旬に、わき芽の長さが10cm程度になったかき挿し苗を、親株の付け根より掻き取って用いる。穂は、天幅1m程度、高さ15cm程度の畝をつくり、5×10cm程度の間隔で挿す。挿し芽後は十分に灌水する。1週間程度は、株の消耗を抑えるために寒冷紗などで30%程度遮光する。

(4) かき挿し苗の挿し芽して発根後に、有機配合肥料（窒素6%程度）を1㎡当り100gを条間に施用するとともに、液肥1000倍を1週間に1回、2度程度施す。

(5) 土寄せ苗の場合、9月上中旬頃に土寄せする。充実した苗をとるために、畝10m当り有機配合（窒素成分6%程度）1kgとそさい5号200g程度を施す。

(6) 定植時期は春の芽立ちを良くするため、奥越地方で9月下旬～10月上旬、福井平坦部で10月上旬、若狭地方で10月中旬までに植え付けるよう定植準備を進める。輪作の間隔が短いとキクの生育が極端に低下するため、最低でも3年間は間隔をあけることが望ましい。

(7) 標準的作業過程と施肥量（10a当り資材量）



(8) 排水が悪いと越冬性が低下するので、排水の良い圃場を選定する。額縁排水など排水路の整備を行う。

(9) 標準的な畝幅は1.3mとするが、排水の悪い圃場や耕土の浅い所では狭めにとる。畝の高さを20cm以上確保する。畦成形後、速やかに灌水し、除草剤の前処理

剤を散布しておけば、翌年まで抑草効果がある。

- (10) 栽植密度は35cm条間の2条植えとし、株間は10cmを標準に芽立ちの悪い品種はこれより狭くし、芽立ちの良い品種は広くする。また、6月咲きや芽立ちの悪い品種は早めに定植する。

2 秋ギクの肥培管理と防除

肥効が落ち、葉色が淡くなり、葉の生育が悪くなっている場合は、マルチの条間部分を破り、雨水を入れることで、土壌中肥料の肥効を高める。また、1000倍に希釈した液肥を葉面散布するか、開花30日前後に速効性の化成肥料を少量施用する。ただし、白さび病、黒さび病の兆候がみられる場合は控える。また、8月中下旬からオオタバコガの密度が増加するため、ローテーション防除を行い、被害の抑制を図る。

3 キクの主要病害虫防除

(1) キクの白さび病

9月に入り気温が低下し、雨が多くなると、白さび病発生の好適条件となるので防除を徹底する。下葉に病斑がある場合は病葉を除去し、チルト乳剤25、アンピルフロアブルなどの治療剤を葉裏にもかかるように散布する。ただし、感受性が低下した薬剤は、散布しない。

- (2) アブラムシ類は圃場の周辺（畝のはし）から侵入するので、初期の防除に努める。薬剤抵抗性の発生を避けるため、系統の異なる薬剤（例：オリオン水和剤40（カーバメート系）、アーデント水和剤（ピレスロイド系）、モスピラン水溶剤（ネオニコチノイド系）、ウララ50DF（フロニカミドなど）を交互に散布する。数回に1回はエコピタ液剤等の気門閉塞で殺虫する剤を取り入れ、抵抗性害虫の増殖を抑制するとよい。

- (3) アザミウマ類も多くなるので、膜切れ4～5日前より薬剤散布を励行する。

4 キククロロティックモットルウイロイドについて

- (1) 病気の特徴として、キク下葉に退色・緑黄斑症状が現れる。品種や他のウイルス、ウイロイドとの重複感染により症状が異なる。
- (2) 伝染方法は、接触（汁液）伝染のみであるため、下葉かき、摘蕾などの管理作業は、感染が疑われる株を後回しとし、手袋を変えたり、はさみ等使用器具を火などで消毒したりしながら作業を進める。
- (3) 台風やネット上げ時の葉擦れによっても感染拡大するため、疑わしい品種は導入しない。
- (4) 感染株は圃場から除去し、他株に感染が拡大しないようにする。

5 スイセンの管理

- (1) 季咲スイセンでは、9月上中旬に雨量が少ないと開花期が遅れる傾向があるので、前年に葉先枯病の発生が少なく、用水が確保できる圃場では灌水する。夕方から夜間に灌水し、昼間は溝に停滞水がないようにする。
- (2) 促成栽培の遮光資材の取り外しは、気温25℃以下になった時点（9月15日頃）を目安とし、曇天の時に行う。
- (3) 促成栽培では9月下旬以降の灌水をやめ、根腐れ防止のため、溝さらえ等圃場排水を徹底する。
- (4) 球根養成圃場では、PK化成をa当たり5kg、マグフミン等の石灰資材を10kg施す。
- (5) イノシシの獣害が多くみられる地域では、電気柵等で対策する。

- (6) 台風対策をしっかりと行い、ハウス栽培では補強を行う。雪害にも備えるよう、支柱などを準備し、十分に補強しておく。

6 ストックの管理

- (1) コナガは育苗中から開花期にかけて常時発生し、葉裏から食害される。苗や生育初期に心葉が食害されると被害が大きく、生育が遅れ枯死することもある。抵抗性の発達しやすい虫であるので、薬剤散布後は効果を確認し、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。トアロー水和剤CT、コテツフロアブル、ノーモルト乳剤などが有効である。コナガコンなどの交信攪乱剤を用いる場合はできるだけ広域に設置する。
- (2) 気温が高い時期の育苗では、立枯れ性病害の予防対策としてオーソサイド水和剤80を散布する。立枯れ性病害が発生した場合は、被害株を抜き取り、病原菌を判別する。簡易な判別法では、苗立枯病（リゾクトニア菌）の発病株を引っ張ると、地際からちぎれるが、苗腐病（ピシウム菌）の場合は、地際部がこより状にくびれ、引っ張るとちぎれないで、根がついてくる傾向がある。生育がやや進むと、苗立枯病では地際部分から褐変し、表皮が脱落して、茎の髓部のみとなるが、苗腐病は根が褐変し、生育不良や萎凋する。
- (3) 本圃の定植前に立枯れ性病害の予防対策としてガスタード微粒剤20～30kg/10aで土壌消毒する。
- (4) 定植後の遮光の期間が長くなると、徒長するばかりでなく花芽分化が遅れ、開花が遅延するので、遮光資材は活着後にできるだけ早く除去する。
- (5) 定植後1か月間は、1週間に1回の間隔で、液肥を積極的に施用し、活着と初期生育を促す。
- (6) ストックの中生や晩生品種では、ビビフルフロアブルの1000倍を、葉数10～14枚時と、その7～10日後に2回茎葉散布することで、開花が促進される。10a当たり1000を目安に散布する。
- (7) 9月下旬～10月上旬の花芽分化前後に高温に遭遇すると、花とびや心止まりが発生するため、10月中旬まで気温17℃を目安にサイドビニールを開放する。
- (8) 10月下旬から保温を開始するが、日中は必ず換気して温度較差を少なくする。
- (9) 発蕾までは草丈を確保するため、灌水を充分に行う。発蕾以降は徐々に灌水回数を減らし、開花期が近づいたらさらにひかえて切り花の品質向上を図る。

7 ハボタンの管理

- (1) 栽培中から開花期にかけてヨトウムシ、アオムシ類等が発生し、食害される。苗や生育初期に成長点の芽が食害されると被害が大きく、生育が遅れ枯死することもある。抵抗性の発達しやすい虫であるので、薬剤散布後は効果を確認し、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。フェニックス顆粒水和剤、プレオフロアブル、ノーモルト乳剤などが有効である。
- (2) 葉かき作業を順次行う。下葉かきを生育期間内に3～4回行い風通しを良くするとともに草丈を伸ばす。初期はある程度込ませたほうが草丈が伸びるため、1度にするのはなく、順次ゆっくりしたほうが草丈は伸びる。
- (3) 水管理
露地栽培では干ばつが続いたときやハウス栽培で土壌水分が十分でない場合は、灌水を行い、適切な水管理を行う。逆に、秋の長雨で圃場に停滞水がある場合は排水対策を行う。